

平成二十五年 第一回午前

平成二十五年二月一日実施

京華中学校 入学試験問題 国 語

一、つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

おおきな舞台で合唱するのは、はじめてではない。これまでも何度かNコンや朝コンで歌ったことがある。入場する直前の舞台袖ではいつも、小声ではげましあったり、わらったりしていた。不思議とそのようなとき、歌詞をさらって、どこをどのように歌おうなどというおさらいはしなかった。

頭のなかで百回歌えば、百回おなじに歌える。けれど実際の舞台ではそうならない。百回中の九十五回は平凡な演奏で、四回くらいノリの悪いダメな演奏があり、そして一回くらいは神がかったような演奏ができる。本番のステージで、どうか[]がまわってきますようにと祈る。練習しまくって、準備を万端にととのえて、最後の最後は、祈るしかない。

十一校目の合唱を、ステージ袖に設置された反響板の後ろで聞いていた。周囲はうす暗い。移動してすぐは、自分の手足も見えないほどだった。反響板の裏側に設置されているモニターが光を放っている。演奏中の合唱部員たちが映し出されており、どうしてもそれをじっと見てしまう。だれも言葉を発さない。聞こえてくる課題曲のテンポがうちとは異なっていた。影響をうけないように、耳を手でおさえたり、耳元を手のひらでパタパタとやって聞こえないようにしたりする。

期待にこたえたい、というプラスの思考と、失敗したらどうしよう、というマイナスの思考が混在する。モニターの光に照らし出された一年生のくちびるがふるえていた。頭が真っ白になっているのだらうなとおもう。自分も一年生のときはそうだった。「こんな風に歌おう」などと、事前にかんがえていたことがすべてふっとんでしまうのだ。三年生になった今現在の自分はどうだろう。緊張を気合いでねじふせようとしているような気がする。最後の大会だからにちがいない。次の代にすばらしい状態でつなぎたかった。

やがて自由曲がおわり、観客席の方から拍手がふってくる。係員の誘導で、十一校目の合唱部員たちがステージ上手側の出入り口から楽屋廊下に出ていった。

私たちの番だ。反響板の後ろから出て、ステージ上のひな壇にむかう。視界が上下左右にひろがって、どこまでも広い空間に私たちは姿をさらす。一階席、二階席、ともにほぼ満席状態で、無数の人の顔がいつせいに私たちをのぞきこんでいるようにおもえる。さきほどの拍手がおわり、しんとしずまりかえった。

声を発してはならない。音楽というパズルのピースになるのだ。ひな壇に上がる。音をたてないようにと注意する。ゆっくり、胸をはってあるくようにこころがける。履いているローファーが、カツカツと音をたてないようにと。

柏木先生が、下手側に配置されているグランドピアノの横に立つ。一応、楽譜を譜面台にたてかける。いつも見ないし、譜めくりをする人もいないけれど。

辻エリが、たった一人、私たちの前に進み出た。客席からむけられる大勢の視線の圧力を引き受ける防波堤のようだ。私たちは彼女についていけばいい。

舞台上手から順番に、男声パート、アルトパート、ソプラノパートの順に三列で整列した。司会者が私たちの中学校名を紹介する。指揮の辻エリが観客にむかって一礼し、まわれ右をして私たちにむきなおった。柏木先生も一礼後ピアノに座る。

男声パートのならんでいる一画で、向井ケイスケが派手なくしゃみをする。その音はホール内にひろがった。大勢の観客と、Nコンの運営をしている係員が彼のほうをふりかえる。くしゃみは意図的なものだった。下手側にあるグランドピアノから視線をそらせるため、上手側の向井ケイスケが注意をひきつけてくれたのだ。その隙に、柏木先生が服の裏にかくしていた携帯電話を取り出し、自分の足もとに置いた。折りたたみ式の携帯電話をくの字にして横たえる。その上に足首まである長いスカートの裾をかぶせた。一連の動作はすばやかだったし、客席とは反対側の左手でおこなわれた。見ていた人がいたとしても、スカートの裾をなおしただけに見えただろう。通話中の携帯電話をステージに持ち込んでいるなんて気づかれたら、減点どころのさわぎではない。しかし、見咎められてストップの声がかかることはなかった。

柏木先生の電話は、松山先生の妹のアカリさんの電話とつながっていた。五島のとある産科で、出産に立ち会っていると、松山先生の旦那さんの手により、アカリさんの電話は、松山先生の顔のそばに置かれているはずだ。本番直前、提案された計画に対して柏木先生は即断即決で賛成し、向井ケイスケが廊下で計画内容を広めている間、彼女はアカリさんに電話をかけて松山先生のもとに携帯電話をとどけるように指示を出したのである。

指揮をする辻エリが、私たちの顔を見渡す。彼女の表情に、さきほどまでであった不安はもうない。運命に挑むような決意が見える。ひな壇の私たちに電気のようなものが走った。全員がおなじおもしろいを共有していた。これまでに体験した、どん

な大会ともちがつている。金賞をとって勝ち進みたいという願望もなければ、ミスをしないうかという恐怖も消えた。今、私たちにあるのは、もっと純粹で、つよい心だった。私たちは、ただ歌を届けたかった。海をわたったところにいる、大切な人に。

「くちびるに歌を持て、ほがらかな調子で」ってね。それをわすれないで」

松山先生の言葉をおもいだす。きつと、その通りだ。どんなに苦しいときでも、つらいときでも、不幸なときでも、迷ったときでも、かなしいときでも、くちびるに歌をわすれなければ、だいじようぶ。私たちは涙をぬぐって、いつだって笑顔になれる。

辻エリの腕がうごいた。ピアノの澄んだ音の粒が、きらきらとホール内に反射する。

課題曲『手紙〜拝啓 十五の君へ〜』。

(中田永一『くちびるに歌を』による)

1. にあてはまることばとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 大切な一回 イ 感動の一回 ウ 奇跡の一回 エ 最後の一回

2. 線部 1 「不思議とそのようなとき、……おさらいはしなかった」のはなぜですか。「くから」に続くように三十三字で探し、初めと終わりの五字を抜きだしなさい。

3. 線部 2 に「だれも言葉を発さない」とありますが、この時のみんなの気持ちを、「く気持ち」に続くように四十六字で探し、初めと終わりの五字を抜きだしなさい。

4. 線部 3 「音楽というパズルのピースになるのだ」に表れている私の気持ちとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 私たち一人ひとりの声は少しずつ異なるけれど、それを上手に組み合わせられれば素晴らしい演奏になるはずだと確信している。

イ それぞれが自分の役割を果たし、力を合わせて一人ひとりの声を組み合わせることで、なんとか素晴らしい演奏にしたいと願っている。

ウ 男声、アルト、ソプラノの各パートが互いに調和することで、大勢の観客に恥ずかしくない演奏ができるはずだと自分を励ましている。

エ 今まで練習しまくってきたことをむだにしないために、大きな失敗をせず次の代に素晴らしい状態でつないでいきたいと願っている。

5. 線部 4 「客席からむけられる大勢の視線の圧力を引き受ける防波堤のようだ」は、どのようなことをたとえていますか。符号で答えなさい。

ア 今日の辻エリはいつもとちがつて落ち着きがあり、大きく力強い感じのする指揮者として、観客と私たちの前に立っていたこと。

イ 緊張している私たちの気持ちを和らげようとして、辻エリが、いつもの合唱の時より早く指揮者台に立ってくれたこと。

ウ 辻エリが、指揮者として客席の注目を集める位置に立ったことによって、観客の視線の圧力から私たちを守っていること。

エ 私たち合唱部員の中から辻エリが一人で前に進み出たので、今日の合唱の指揮者が彼女であることがわかり、みんなの安心感が増したこと。

6. 線部 5 に「くしゃみは意図的なものだった」とありますが、この「くしゃみ」の目的はどのようなことでしたか。「携帯電話」、「グランドピアノ」ということばを必ず使って、「柏木先生がく」の後に続くように五十字以内で説明しなさい。

7. 線部 6・7 の「彼女」の指し示している人物として最も適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア 柏木先生 イ 松山先生 ウ アカリさん エ 辻エリ

8. 線部 8 「全員がおなじおもいを共有していた」とありますが、どのようなおもいを共有していたのですか。文中の言葉を使って二十字以内で説明しなさい。

二、つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ともかく正しいこと、しかも、100%正しいことを言うのが好きな人がある。非行少年¹に向かって「非行をやめなさい」とか、「シンナーを吸ってはいけません」とか、忠告する。煙草^{たばこ}を吸っている人には、「煙草は健康を害します」と言う。何しろ、誰^{だれ}がいつどこで聞いても正しいことを言うので、言われた方としては、「はい」と聞くか、無茶苦茶でも言うより仕方がない。後者の場合だとすぐに、「そんな無茶を言うてはいけません」とやられるにきまっているから、まあ、黙^{だま}って聞いている方が得策^{とくさく}ということになる。

もちろん、正しいことを言うてはいけないなどということはない。しかし、それはまず役に立たないことくらいは知っておくべきである。たとえば、野球のコーチが打席にはいる選手に「ヒットを打て」と言えば、これは100%正しいことだが、まず役に立つ忠告ではない。ところが、そのコーチが相手の投手は勝負球にカーブを投げてくるぞ、と言ったとき、それは役に立つだろうが、100%正しいかどうかはわからない。敵は裏をかいてくることだってありうる。あれもある、これもある、と考えていては、コーチは何も言えなくなる。そのなかで、あえて何かを言うとき、彼は「その時その場の真実」に賭けることになる。それが当^{あた}れば素晴らしい。もつとも、はずれたときは、彼は責任を取らねばならない。

このあたりに忠告することの難しさ、面白さがある。「非行をやめなさい」などと言う前に、この子が非行をやめるにはどんなことが必要なのか、この子にとって今やれることは何かなどと、こちらがいろいろと考え、工夫^{くわふ}しなかったら何とも言えないし、そこにはいつもある程度^{ていど}の不安や危険がつきまとうことであろう。そのような不安や危険に気づかずに、よい加減なことを言えば、悪い結果がでるのも当然である。

ひよつとすると失敗するかも知れぬ。しかし、この際はこれだという決意をもつてするから、忠告も生きてくる。己^{おのれ}を賭けることもなく、責任を取る気もなく、100%正しいことを言うだけで、人の役に立とうとするのは虫がよすぎる。そんな忠告によって人間が良くなるのだったら、その100%正しい忠告を、まず自分自身に適用してみるとよい。「もつと働きなさい」とか、「酒をやめよう」などと自分に言ってみても、それほど効果があるものではないことは、すぐわかるだろう。

もつとも、自分はその通りにやっているし、効果もあげている、という立派な方も居^おられるが、そこまで立派な方は人間を通りこして、既にホトケ^{すて}になつて居られるのだろう。ホトケに「こころの処方箋^{しやほうせん}」など不要なのはもちろんである。実際、いつどこでも誰にでも通じる正しいことのみを生きていては、「個人」が生きていると言えるのかどうか疑わしい。それは既にホトケになっている。

100%正しい忠告は、まず役に立たないが、ある時、ある人に役立った忠告が、100%正しいとは言^がい難いことも、もちろんである。考えてみると当り前のことだが、ひとつの忠告が役立つと、人間は嬉^{うれ}しくなつてそれを普遍的真理^{ふくへんてきしんり}のように思い勝ちである。たとえば、次のようなこともあった。

ある宗教家が、「死にたいという人に、本当は死ぬ人はない」と思い込み、(こんなことは決して断言できない。「死にたい」と言つて自殺する人はたくさんある)「自殺をしたい」という人に、それなら自殺の仕方を教えてやろうと詳細^{しやうさい}に死に方を教えてやると、その人はびくついてしまつて自殺を断念した。それに味をしめて、その宗教家が次の人にも同じ手を使つたら、その人が言われたとおりの方法で自殺をしてしまったので、自殺の方法を教えた宗教家は、すっかり落ちこんでしまった。

これは極端な例であるが、このようなことは、あながいよく生じる。これは、一回目の時には、相当に自分を賭けて言っているのに、二回目になると、前のようにうまくやつてやろうと思つて、慢心^{まんしん}が生じたり、小手先^{こてさき}のことになつて、己を賭ける度合が軽くなつてゐるために、うまくゆかないのである。前と同じようにやろう、などと言っても、考えてみると人生に「同じこと」などあるはずがないのだ。もちろん、「昨日も七時に朝食を食べた、今日も同じように……」というレベルでなら、同じことは存在し、朝食のパンを毎朝正しく焼くことも可能であろう。しかし、ある個人の存在が深くかわつてくるとき、そこには、同じことは起こらなくなつてくるし、まさにそのときに、その人へのみ通じる正しいことが要求さ⁶れ、それは、一般に人が考えつく、100%正しいこととは、まったく内容を異にするのである。

ここに述べられたことは、100%正しいことである、などと読者はまさか思われまいだろうが、念のため申し添えておく。

(河合隼雄『こころの処方箋』による)

1. ———線部 1 に「非行少年に向かつて……とか、忠告する」とありますが、筆者は「非行少年」にこのような忠告をするより前に、どのようなことを考えるべきだと述べていますか。四十二字で探し、初めと終わりの五字を抜きだしなさい。

2. ———線部 2 に「相手の投手は勝負球にカーブを投げてくるぞ」とありますが、それが正しいかどうか分からないのに、なぜコーチはこのような言うのですか。「くから」に続くように、十五字で抜きだしなさい。

3. ———線部 3 に「忠告することの難しさ、面白さがある」とありますが、筆者がそのように述べている理由として、最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 正しい忠告が役に立たないことを知っているのは、筆者をはじめとする一部の人に過ぎないから。

イ みんなに役に立つ忠告は、実際には役に立たないこともあるのが現実の世界だから。

ウ 役に立つ忠告は、その人その時に限定されるものののに、だれもがそのことに気づかず忠告してしまうから。

エ 失敗する可能性を考えながらも、ここはこれだという決意をして行うことで、生きた忠告になるから。

4. ———線部 4 「100%正しい忠告」について、つぎの(1)・(2)に答えなさい。

(1) 「100%正しい忠告」とはどのようなことですか。具体的に説明している部分を、十六字と十八字で抜きだしなさい。

(2) 「100%正しい忠告」を筆者はどのようなものだと考えていますか。「くもの」に続くように、六字で抜きだしなさい。

5. ———線部 5 「このようなこと」とは、どのようなことですか。三十字以内で説明しなさい。

6. ———線部 6 に「それは、一般に人が考えつく、100%正しいことは、まったく内容を異にするのである」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 人生には同じことなど存在しないから。

イ 人それぞれに感じ方や考え方が異なるから。

ウ 個人によって言葉の重みが異なるから。

エ 100%正しいことは人生に存在しないから。

7. 本文の内容と合致する最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 人に忠告をするときには、場合によっては自分が責任をとらなければならないことを覚悟しておく必要がある。

イ 人に忠告をするときは、その状況に応じてさまざまに考えても、確信を持って完全に正しいことを言うべきである。

ウ 100%正しい忠告を自分に適用して完全に効果をあげている人は、その場その場の自分の気持ちを大切に生きているとは言えない。

エ 100%正しい忠告はありえず、どんなに論理的に考えつくしても最後は自分を賭けるしかないのだから、人に忠告するのはやめた方がよい。

三、つぎの 1 ～ 5 の ———線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

1. 雑木林を歩く。 2. 序文を読む。 3. 能率を上げる。

4. 台風に備える。 5. 解決に至る。

四、つぎの 1 ～ 5 の ———線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

1. 散歩をニツカとしている。 2. ジシヤクを使って方位を調べる。 3. ジョウカ町を歩く。

4. 成功をオサめる。 5. ヒマしに強くなっている。

